

外国にルーツある元「子ども」ら 日本の学校体験語り合う

2026年2月9日 18面記事

カテゴリ：関連団体・組織



「マジョリティが変わるための提言」に臨む3人の「元『子ども』」と聴講する学生ら

増える外国人住民との共生を目指し、「内なる国際化」に対応した社会の形成を目指している明治学院大学は1月30日、「外国ルーツの元『子ども』たちからの提言」として、シンポジウムを開いた。南米で幼少期を過ごした2人の日系人と、日本生まれのベトナム人が、日本の学校で過ごした体験などについて語り合った。このうち、2人はそれぞれの事情により週末の部活動への参加が難しかったことなどを紹介した。

「内なる国際化」巡りシンポ 週末、部活動参加の難しさ説明

同大学は、海外の教育機関と提携を結ぶなど「外に向けた国際化」に力を入れると同時に、11年前から「内なる国際化」に関する事業を続けている。

「元『子ども』」による鼎談では、同大学非常勤講師で明治大学特任准教授の松田デレクさんが進行役として他の2人から発言を引き出しつつ、自らの体験や見解を述べた。

松田さんは、1920年代にペルーへと渡った曾祖父母を持つ日系ペルー人。小学校3年生までペルーで過ごし、フジモリ政権下の1991年、日系人迫害の恐れが強まる中で安全を求めて家族で日本に移住した。

来日当初、日本語の習得には苦労した。現在のような日本語教育はまだ普及していない中、教員や級友に恵まれ、2年目から言葉の壁は低くなっていった。

ただ、夜遅くまで働き詰めの両親、弟・妹との生活は、今でいう「ヤングケアラー」のようだったと振り返る。役所での手続きは、親に代わって松田さんが小学生の頃から済ませざるを得なかった。

その後、国内の大学・大学院へと進み、教育学での博士号も得て、現在は大学教員を務める。

そんな松田さんが語った部活動体験。吹奏楽部に入ったものの、日曜日は、教会に行かなければならず、土曜日も聖書を読む会があった。吹奏楽部の演奏会には出られない苦汁を味わった。

部活動体験を語ったもう一人は、1982年に難民としてベトナムから来日した親の下、日本で生まれ育ったグエンハナムフォンさん。日本語はもちろん、ベトナム語も習得し、現在は通訳などとして活躍する。

中学生の頃、ある運動部に入部。土日とも活動があった。ベトナム人コミュニティの活動との両立が壁となった。家族として、ベトナム人コミュニティの活動に積極的に参加しており、土日は、家族のための時間にしかたなかった。

部活動は休みづらく、休むための説明を考えることが負担となって、結局、退部へと至った。

日系ブラジル人で小学校3年生だった1991年に来日した宮ヶ迫ナンシー理沙さんは、「私たちはずっと、学校教育の時から分けられてきてしまった気がする」「大人になっても異なる生活圏の人たちともほとんど交わることがなくて、特別のことをしないと出会えない、接点を持っていないような社会になっている気がする」などと述べた。

国籍の壁に苦しむ 皆が特別との感覚広まれば

この鼎談で、浮かび上がった現代の課題の一つは、国籍の壁。松田さんは、高校入学以降、学費は自分で賄ってきた。奨学金を得て大学院まで進んだが、奨学金の国籍要件に苦しんだ。松田さんが使える奨学金は限られた。

現在も似たような状況があり、外国ルーツの子どもたちのために、周囲の大人が奨学金を探し出してくれても、条件が合わず、かえって子どもたちを失望させるといった話を耳にするという。

フォンさんは、ワーキングホリデーを断念した。海外で一定の条件の下、仕事をして賃金を得られるビザ（査証）を得ようと申請手続きを進め、代金も払ったが、説明書類の分かりにくい場所に、国籍要件が記されていた。

宮ヶ迫さんは、「日本の学校に対して思うこと」を問われ、外国にルーツがあることを本人が明かした際、周囲から「全然気にしない」などと言われることを挙げた。

自分のルーツが無視された思いに陥ると説明。「日本の学校は平等感覚が強い。外国につながる子だけでなく、みんな全部違う、みんな特別だという感覚がもっと広まった方がいい」と訴えた。

今回のシンポで改めて明らかになった「国籍の壁」。新年度からは、高校の授業料が無償となる制度で所得制限を撤廃する見込みだが、新たに国籍要件が加わる。日本国籍を持たない場合、「日本生まれまたは小学校卒業までに来日」「小・中学校を卒業」などの条件を満たさなければならない。